

ご案内図



◎地下鉄

都営大江戸線 ② 若松河田駅 下車(若松口より徒歩5分)

..... ③ 牛込柳町駅 下車(西口より徒歩5分)

都営新宿線 ④ 曙橋駅 下車(A2出口より徒歩8分)

◎都営バス

宿74系統 ① 新宿駅西口 → 東京女子医大前

宿75系統 ① 新宿駅西口 → 東京女子医大前 ← ⑧ 四谷駅前 ← 三宅坂

早81系統 早大正面 → ⑤ 馬場下町(早稲田駅) → 東京女子医大前 ← ⑥ 四谷三丁目 ← 千駄ヶ谷駅前 ← 原宿前 ← 渋谷駅東口

高71系統 ⑦ 高田馬場駅前 → 東京女子医大前 ← ⑨ 市ヶ谷駅前 ← 九段下

東京女子医科大学病院

〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1 Tel: 03-3353-8111(代表)

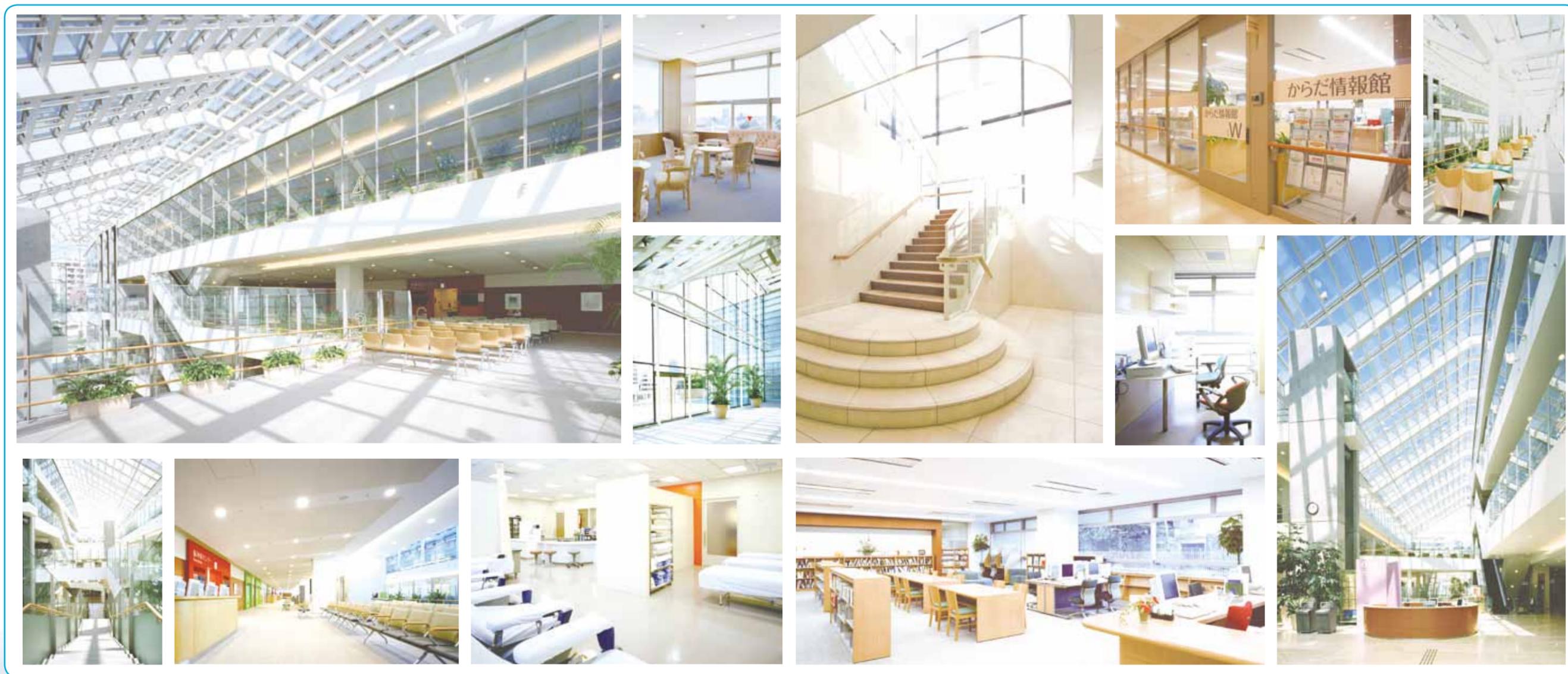


東京女子医科大学病院

病院案内

平成28年度版(2016~2017)

患者さんの視点に立った
 安心で最良の医療を提供します。



CONTENTS

基本理念・基本方針・「5S」の精神	4	診療部門紹介	9
沿革	5	外来案内	24
概況	6	病棟案内	25
病院組織図	8	構内見取図	27

基本理念

患者視点に立って、安全・安心な医療の実践と高度・先進な医療を提供する。

基本方針

- 1 誠実な慈しむ心（至誠と愛）をもって、患者視点に立った、きめ細やかで温かい心の通った医療を実践します。
- 2 先進医療の推進や高度医療の提供に尽力し、質の高い安全な医療を提供します。
- 3 医療連携をとおして地域医療により一層貢献します。
- 4 明日を担う人間性豊かな医療人の育成をめざし、充実したカリキュラムや実践的な研修プログラムを実施します。
- 5 本学の特性を活かして女性医療人を育成し、働く環境を創出します。

「5S」の精神



沿革

明治

- 明治 33 年 (1900 年) 12 月 東京女医学校開設 (5 日：創立記念日)
- 明治 37 年 (1904 年) 7 月 私立東京医学校設立認可
- 明治 37 年 (1904 年) 9 月 東京至誠医院設置
- 明治 41 年 (1908 年) 12 月 附属病院開設許可
- 明治 45 年 (1912 年) 3 月 私立東京女子医学専門学校設立認可

大正

昭和

- 昭和 5 年 (1930 年) 12 月 附属病院 (現 1 号館) 竣工
- 昭和 11 年 (1936 年) 10 月 第二病棟 (現 2 号館) 竣工
- 昭和 27 年 (1952 年) 4 月 新制東京女子医科大学発足
- 昭和 30 年 (1955 年) 5 月 附属日本心臓血圧研究所 (のち心臓病センターと改称) 設置
- 昭和 40 年 (1965 年) 4 月 附属日本心臓血圧研究所 (のち心臓病センターと改称) 竣工
- 昭和 40 年 (1965 年) 4 月 附属消化器病・早期がんセンター (のち消化器病センターと改称) 設置
- 昭和 42 年 (1967 年) 10 月 神経精神科病棟竣工
- 昭和 42 年 (1967 年) 12 月 附属消化器病センター竣工
- 昭和 46 年 (1971 年) 10 月 附属脳神経センター竣工
- 昭和 50 年 (1975 年) 7 月 糖尿病センター設置
- 昭和 53 年 (1978 年) 3 月 中央病棟竣工
- 昭和 54 年 (1979 年) 4 月 腎臓病総合医療センター設置
- 昭和 55 年 (1980 年) 7 月 東病棟竣工
- 昭和 59 年 (1984 年) 4 月 内分泌疾患総合医療センター設置
- 昭和 59 年 (1984 年) 9 月 母子総合医療センター設置
- 昭和 62 年 (1987 年) 3 月 糖尿病センター竣工

平成

- 平成元年 (1989 年) 4 月 救命救急センター設置
- 平成 2 年 (1990 年) 10 月 呼吸器センター設置
- 平成 2 年 (1990 年) 10 月 血液内科設置
- 平成 15 年 (2003 年) 3 月 総合外来センター竣工
- 平成 21 年 (2009 年) 12 月 第 1 病棟竣工

概況

平成 28 年 4 月現在

* 内容は、適宜更新します。最新の情報は、病院のホームページをご覧ください。http://www.twmu.ac.jp/into-twmu/

開設者

学校法人 東京女子医科大学

病院長

田邊 一成

副院長

世川 修 (医療安全対策・患者サービス部門)
野村 実 (医療安全対策部門)
飯田 知弘・内潟 安子 (診療部門)
山本 雅一 (診療支援部門)
坂井 修二 (管理部門)
川名 正敏 (臨床研修教育部門)
坂本 倫美 (看護部門)

看護部長

坂本 倫美

薬剤部長

木村 利美

事務長

飯田 真由美

許可病床数

1,379 床 (一般：1,314 床 精神：65 床)

職員数

(平成 28 年 4 月現在)

医師 940 名
看護師 1,235 名
その他 995 名
合計 3,170 名

患者数

(1 日平均)

	外来患者数	入院患者数
平成 25 年	4,197 人	1,211 人
平成 26 年	3,872 人	1,146 人
平成 27 年	3,648 人	1,073 人

機能

- 救急告示病院
- 臨床研修指定病院
- 災害拠点病院
- 神経難病医療拠点病院
- 肝臓専門医療機関
- 東京都脳卒中急性期医療機関
- 東京 DMAT 指定病院
- 公害医療機関
- 臨床修練指定病院
- エイズ診療拠点病院
- 治験拠点医療機関
- 移植認定施設(心臓・小児心臓・腎臓・肝臓・腎臓・骨髄・末梢神経臓器)
- 総合周産期母子医療センター
- 東京都小児がん診療病院

保険医療機関承認

平成 24 年 10 月 1 日～平成 30 年 9 月 30 日

先進医療 (承認)

- ① 樹状細胞及び腫瘍抗原ペプチドを用いたがんワクチン療法 [食道がん、胃がん、肝臓がん(転移性含む)、膵臓がん、胆道がん]
- ② 術後のホルモン療法及び S-I 内服投与の併用療法 原発性乳がん(エストロゲン受容体が陽性であって、HER2 が陰性のものに限る。)



施設基準の承認

平成 28 年 4 月現在

< 基本診療料の施設基準 >

- 地域歯科診療支援病院歯科初診料
- 一般病棟入院基本料(7 対 1)
- 診療録管理体制加算 2
- 療養環境加算
- 精神科リエゾンチーム加算
- 感染防止対策加算 1
- ハイリスク妊婦管理加算
- 病棟薬剤業務実施加算 1・2
- 精神疾患診療体制加算
- 特定集中治療室管理料 3
- 小児入院医療管理料 1・4

- 歯科外来診療環境体制加算
- 精神病棟入院基本料(13 対 1)
- 急性期看護補助体制加算 2 (50 対 1)
- 重症者等療養環境特別加算
- 栄養サポートチーム加算
- 患者サポート体制充実加算
- ハイリスク分娩管理加算
- データ提出加算 2
- 地域歯科診療支援病院入院加算
- 総合周産期特定集中治療室管理料

- 歯科診療特別対応連携加算
- 超急性期脳卒中加算
- 看護補助加算 2
- 無菌治療室管理加算 1・2
- 医療安全対策加算 1
- 褥瘡ハイリスク患者ケア加算
- 呼吸ケアチーム加算
- 退院支援加算 2
- 救命救急入院料 2
- 新生児治療回復室入院医療管理料

< 特掲診療料の施設基準 >

- ウイルス疾患指導料
- がん患者指導管理料 1・2・3
- 院内トリアージ実施料
- 薬剤管理指導料
- 歯科治療総合医療管理料
- 遺伝学的検査
- 検体検査管理加算(Ⅳ)
- 時間内歩行試験及びシャトルウォーキングテスト
- 人工臓器検査、人工臓器療法
- 神経学的検査
- コンタクトレンズ検査料 1
- センチネルリンパ節生検(片側)
- CT 撮影及び MRI 撮影
- 抗悪性腫瘍剤処方管理加算
- 心大血管疾患リハビリテーション料 Ⅰ
- 呼吸器リハビリテーション料 Ⅰ
- 精神科作業療法
- 医療保護入院等診療料
- 透析液水質確保加算 2
- CAD / CAM 冠
- 皮膚悪性腫瘍切除術 (悪性黒色腫センチネルリンパ節加算を算定する場合に限る。)
- 組織拡張器による再建手術(一連につき)(乳房(再建手術)の場合に限る。)
- 骨移植術(軟骨移植術を含む)(自家培養軟骨移植術に限る。)
- 脳刺激装置植込術 (頭蓋内電極植込術を含む。) 及び脳刺激装置交換術、脊髄刺激装置植込術及び脊髄刺激装置交換術
- 緑内障手術(緑内障治療用インプラント挿入術(プレートのあるもの))
- 網膜付着組織を含む硝子体切除術 (眼内内視鏡を用いるもの)
- 網膜再建術
- 上顎骨形成術 (骨移動を伴う場合に限る。)(歯科診療に係るものに限る。)、下顎骨形成術 (骨移動を伴う場合に限る。)(歯科診療に係るものに限る。)
- 乳腺悪性腫瘍手術(乳がんセンチネルリンパ節加算 1 及び乳がんセンチネルリンパ節加算 2 を算定する場合に限る。)
- ゲル充填人工乳房を用いた乳房再建術(乳房切除後)
- 磁気ナビゲーション加算
- 両心室ペースメーカー移植術及び両心室ペースメーカー交換術
- 植込型除細動器移植術、植込型除細動器交換術及び経静脈電極除去術
- 両室ペースメーカー機能付き植込型除細動器移植術及び両室ペースメーカー機能付き植込型除細動器交換術
- 補助人工心臓
- 同種心移植術
- 体外衝撃波胆石破砕術
- 同種死体肝移植術
- 早期悪性腫瘍大腸粘膜下層剥離術
- 腹腔鏡下腎悪性腫瘍手術(内視鏡手術用支援機器を用いるもの)
- 生体腎移植術
- 腹腔鏡下前立腺悪性腫瘍手術
- 胃瘻造設術(内視鏡下胃瘻造設術、腹腔鏡下胃瘻造設術を含む。)
- 貯血式自己血輸血管理体制加算
- 歯周組織再生誘導手術
- 麻酔管理料 Ⅰ・Ⅱ
- 高エネルギー放射線治療
- 画像誘導放射線治療加算 (IGRT)
- 病理診断管理加算 2
- 顎口腔機能診断料 (顎変形症 (顎離断等の手術を必要とするものに限る。)) の手術前後における歯科矯正に係るもの)

- 糖尿病合併症管理料
- 移植後患者指導管理料
- 外来放射線照射診療料
- 医療機器安全管理料 1・2
- 在宅植入型補助人工心臓(非拍動流型)指導管理料
- HPV 核酸検出及びHPV 核酸検出(簡易ジェノタイプ判定)
- 遺伝カウンセリング加算
- 胎児心エコー法
- 皮下連続式グルコース測定
- 補聴器適合検査
- 小児食物アレルギー負荷検査
- 画像診断管理加算 1
- 冠動脈 CT 撮影加算
- 外来化学療法加算 Ⅰ
- 脳血管疾患等リハビリテーション料 Ⅰ
- がん患者リハビリテーション料
- 抗精神病特定薬剤治療指導管理料(治療抵抗性統合失調症治療指導管理料に限る。)
- エタノールの局所注入(甲状腺に対するもの)
- 下肢末梢動脈疾患指導管理加算
- 歯科技工加算

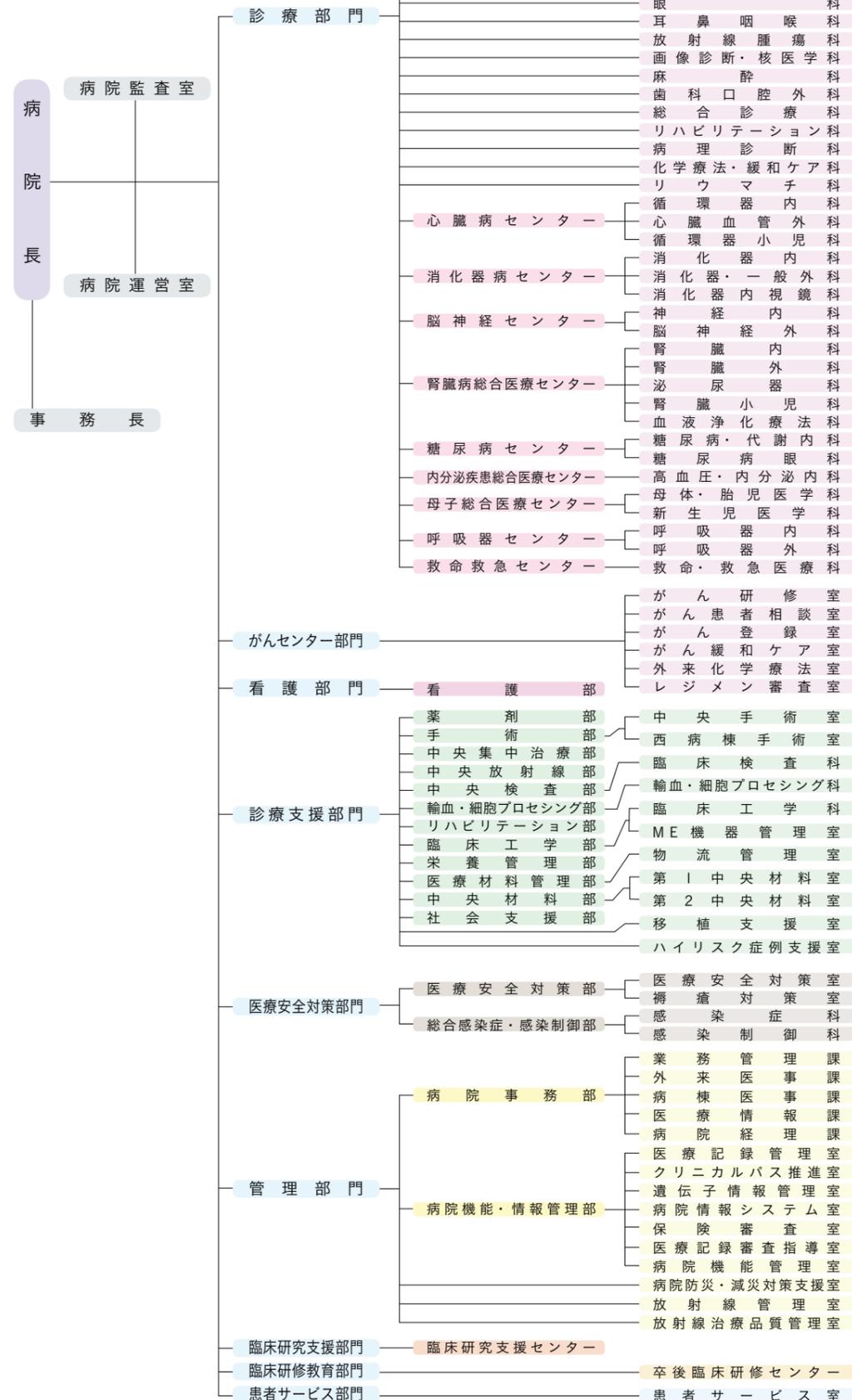
- がん性疼痛緩和指導管理料
- 糖尿病透析予防指導管理料
- ニコチン依存症管理料
- 医療機器安全管理料(歯科)
- 持続血糖測定器加算
- 検体検査管理加算(Ⅰ)
- 心臓カテーテル法による諸検査の血管内視鏡検査加算
- ヘッドアップティルト試験
- 長期継続頭蓋内脳波検査
- ロービジョン検査判断料
- 内服・点滴誘発試験
- ポジトロン断層撮影又はポジトロン断層・コンピューター断層複合撮影
- 心臓 MRI 撮影加算
- 無菌製剤処理料
- 運動器リハビリテーション料 Ⅰ
- 歯科口腔リハビリテーション料 2
- エタノールの局所注入(副甲状腺に対するもの)
- う蝕歯無痛の高洞形成加算

< 入院時食事療養について >

入院時食事療養(Ⅰ)及び特別管理の届出を行っており管理栄養士の管理のもと、適時・適温(夕食は午後 6 時以降の配膳)及び選択メニュー(1 日 2 食以上の複数の献立から好みの食事を選択するもので、特別な自己負担無し)の食事療養を提供しています。

病院組織図

平成 28 年 6 月現在



診療部門紹介

血液内科 Department of Hematology

血液内科では、急性ならびに慢性白血病、骨髄異形成症候群、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、多血症などの骨髄増殖性疾患、鉄欠乏性貧血、再生不良性貧血をはじめとする種々の貧血、特発性血小板減少性紫斑病など幅広い血液疾患の診療にあたっています。移植治療に関しては、白血病には血縁者間造血幹細胞移植ならびに骨髄バンクや臍帯血バンクを介した造血細胞移植や臍帯血移植を、悪性リンパ腫や多発性骨髄腫には主に自家末梢血幹細胞移植を精力的に行っております。外来では常時2～4人の血液内科専門医が診療できる体制をとっております。大学病院という特色を生かし、幅広い領域の血液疾患について、他科と連携しながら個々の患者に対し最良な医療の提供を目指しております。さらに難治性疾患に対する新規治療法や臨床治験による最先端治療法の導入に積極的に取り組んでおります。日本血液学会研修施設であり、血液腫瘍を含むがん診療全般に関する種々の業務・支援体制が確立しております。

神経精神科・心身医療科 Department of Psychiatry

心の病は国民の健康を脅かす5大疾病のひとつであり、統合失調症、双極性障害、うつ病、不安障害、器質性精神障害などが含まれます。神経精神科・心身医療科は閉鎖病棟65床を有し、難治性疾患を含む、これら多様な精神障害に対する治療を行っています。治療のゴールを病気からの回復と社会参加の促進に置き、現代の精神科医療が到達した最も標準的でバランスの取れた医療の提供をめざしています。具体的にはエビデンスに基づく薬物療法、個別性を重視した心理療法、心理教育、精神科リハビリテーション等からなる包括的なアプローチです。チーム医療を重視し、医師、看護師、臨床心理士、作業療法士、薬剤師、精神保健福祉士からなるスタッフが協働して日々の診療にあたっています。また、高度医療を担う大学病院という特性上、コンサルテーション・リエゾンにも力を入れており、がんをはじめとしたさまざまな病気で治療中の患者さんに対して、心のケアを行っています。この活動は精神科リエゾン・チームが中心となって、各診療科と連携して進めています。

小児科 Department of Pediatrics

小児科は、初診時の年齢が主に16歳未満の内科疾患全般を対象とし、全身を診ることができる数少ない診療科の一つです。「子どもは常に成長・発達している」ということが、おとなとの最も大きな違いであることから、常に子どもの成長発達過程に留意した診療を心がけています。外来診療は、原則として、午前中が主に一般外来、午後は、神経、アレルギー、発育・発達、内分泌、児童精神、血液・腫瘍、栄養・消化器などの専門外来としています。但し、緊急性のある疾患については、予約外、時間外来にも積極的な対応を心がけています。このところ急増している子どもの心の問題には、小児専門の臨床心理士による心理外来を毎日行い、必要に応じて児童精神科医の対応も行っています。大学病院として、遺伝子診断、細胞治療などの先端医療を推進する一方、循環器小児科、腎臓小児科、新生児科、小児外科、脳外科小児グループなど小児専門各分野と連携して包括的診療体制を展開しています。

乳腺・内分泌外科 Department of Breast and Endocrine Surgery

安全第一の診療を心掛けております。乳腺の診療では年間約300人の乳がん手術を経験しています。超音波や乳管内視鏡検査を用いた早期乳がんの診断にも力を入れており、薬物療法や放射線治療などの集学的治療も関連診療科と協調しながら積極的に行っております。外科治療においては見張り（センチネル）リンパ節生検の結果に基づいて脇の下（腋窩）のリンパ節郭清を省略するなど先進的な医療を実施しています。整容性を重視した治療方針のもと、乳房温存手術をはじめ、同時再建手術を受ける患者さんも増えています。内分泌領域では甲状腺や副甲状腺、副腎などホルモンを作る臓器の腫瘍やホルモン過剰症の診断と治療を専門としています。甲状腺がんの手術方針を決めるにはがんの進行度合いを見極めることが重要ですが、なるべく甲状腺のはたらきを温存する手術を提案しています。副甲状腺機能亢進症では摘出すべき病変の位置を正確に診断することにより完治を実現しています。副腎腫瘍に対しては腹腔鏡を使った、体に負担の少ない外科治療を基本としております。また、遺伝性疾患である多発性内分泌腫瘍症やまれな内分泌がん（甲状腺髄様がん、甲状腺未分化がん、副甲状腺がん、副腎がん、悪性褐色細胞腫）なども経験しています。内分泌領域の年間手術数は約300例です。

小児外科 Department of Pediatric Surgery

小児は成人のミニチュアではなく、小児医療は高い専門性をもった領域です。小児外科診療科は、国内でも有数の日本小児外科学会の認定施設であり、年間 250 例以上の小児外科手術を行っています。対象疾患は、出生直後の新生児期から学童期（16 歳未満）までの頭頸部・呼吸器・消化器・泌尿生殖器・内分泌臓器・小児腫瘍など、小児にみられる外科的疾患を広い範囲で取り扱っております。先天性の疾患だけでなく、外傷や生後発現する疾患も同じように小児外科指導医・専門医が治療をいたします。特に、日本内視鏡外科学会技術認定取得医（小児外科領域）による腹腔鏡・胸腔鏡を用いた小児内視鏡手術や、消化器内視鏡診断・治療には 20 年以上の実績があり、新生児も含めた多くの疾患に対する診断・治療が低侵襲に行われています。また、小児科、腎臓小児科、循環器小児科、母子総合医療センター新生児部門とともに小児総合医療センターが設立されており、院内小児関連各科との密接な協力体制のもと、同センターにおける外科部門の中心的役割を担っています。

整形外科 Department of Orthopedic Surgery

手足、体幹に痛みや機能障害をもたらす骨関節、筋肉、神経などの運動器疾患を治療します。これらの疾患は人口の高齢化に伴い増加し、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）の低下を招きます。実際に現在の国民の有訴率をみると 1 位腰痛、2 位肩こり、3 位手足の関節痛と運動器疾患が全て占めており、多数の疾患・患者さんを整形外科が治療します。当科では特に頸部痛・腰痛と麻痺を生ずる椎間板ヘルニア、頸髄症、脊柱管狭窄症などの脊椎疾患は多く、その手術数は年間 300 例以上に達します。そのほか骨粗鬆症、変形性関節症、透析骨症、関節リウマチ、外傷（スポーツ外傷を含む）などによる骨関節疾患も数多く扱っています。特に重症の脊椎・関節疾患（透析骨症・脊椎症、リウマチ脊椎など）を最新の医療技術で安全に治療していることが我々の科の特徴です。

形成外科 Department of Plastic and Reconstructive Surgery

形成外科とは、体表外科ともいわれるほど体の表面すべてに携わる外科です。口唇、口蓋裂、指趾の変形（多指〔趾〕・合指〔趾〕症）漏斗胸などの先天異常の治療や、種々の「あざ」や「しみ」に対するレーザー治療、指切断に対するマイクロサージャリーを用いた再接着術、乳房再建など癌切除後の再建術、そして重症から軽症までのやけどの治療を行っています。ケガによるキズやキズ跡をきれいにするために、最新の医療技術にも取り組んでいます。最近では瞼（まぶた）のたるみや下垂を治したりする、いわゆる「若返り治療」も盛んに行われております。

皮膚科 Department of Dermatology

皮膚科では第 3 土曜日を除く月曜日から土曜日まで、午前中はあらゆる皮膚疾患（湿疹、水虫、いぼ、皮膚がんなど）の初診および再診患者さんを診療しています。午後はパッチテスト、乾癬、蕁麻疹、膠原病、アトピー性皮膚炎、ニキビ、レーザー治療（しみ、あざ、ほくろ）、小手術（ほくろ、小腫瘍）などの診療を行う専門外来を開設しています。専門外来の受診は、一度午前中の一般外来を受診していただいでから、予約をお取りする形で行っています。そのほか、皮膚生検（皮膚病の一部を小さく切除して組織検査を行うこと）の必要な場合は、火曜日と木曜日の午後に予約して行っています。初診はなるべく紹介状を持参して頂きたいと思いますが、紹介状なしでも診察いたします。難治な皮膚病からニキビやシミなどの美容的な問題まで広く診療しており、また常に最先端の治療薬剤・技術の導入を心がけています。ナローバンド UVB 照射装置を用いた光線療法も行っています。

産婦人科 Department of Obstetrics and Gynecology

産婦人科では各ライフステージにおける女性のトータルケアとしてのウイメンズヘルズを目指しています。年々増加傾向にある婦人科悪性腫瘍では診断から治療までを一貫として行い、初診後 1 ヶ月以内の治療開始を可能な限り実践しています。内分泌 / 不妊領域では、合併症を持った患者さんの体外受精や原発性無月経患者さんの診断・治療、女性医学部門では、生活の質を向上させる更年期 / 老年期治療や子宮筋腫・卵巣嚢腫など良性腫瘍の腔内あるいは腹腔鏡を使った低侵襲手術、周産期領域では総合周産期センターである特性を活かした合併症妊娠の管理・分娩さらに母体搬送などを積極的に受け入れています。これら 4 つの分野を柱に各々専門医による特殊外来を設置し、各部門とも他科と密接な連携を取り、合併症を有する患者さんにも安心して女子医大ならではの診療が受けられるよう努力しております。なお当科の周産期部門は母子総合医療センター母性部門ですので、同センターをご参照ください。

眼科 Department of Ophthalmology

患者さん一人一人により良い視機能（クオリティ・オブ・ヴィジョン：QOV）を提供できるように、当科では個々の患者さん毎に最も適した眼科診療を行っています。外来診療では一般眼科診療の他に、黄斑・網膜・硝子体、角膜、ドライアイ、緑内障、ぶどう膜炎、神経眼科、斜視弱視、未熟児小児眼科、色覚などの各専門分野で、最先端の診断機器と治療装置を備えて、特徴ある治療で実績を積み重ねています。特に、失明につながる加齢黄斑変性などの黄斑疾患の治療に力を入れており、「黄斑疾患総合ケアユニット」で専門性の高い診療を総合的に行っております。また、網膜剥離や黄斑疾患などの網膜硝子体疾患をはじめ、白内障、緑内障などに対して、より良い視力回復を目指して、最新の手術機械をそろえて、最先端の手術を積極的に行っています。

耳鼻咽喉科 Department of Otolaryngology

耳鼻咽喉科では鎖骨から上で脳と眼球を除く頭頸部の範囲を扱います。耳と鼻、咽喉（のど）の病気に加えて、聴覚、平衡覚、嗅覚、味覚という感覚器の疾患、顔面神経麻痺、咽喉頭の疾患、摂食・嚥下や発声の問題、唾液腺疾患そして頭頸部領域に発生する腫瘍の診断と治療を行っています。当科はとくに唾液腺疾患の症例が多く、耳下腺腫瘍は良・悪性を含め 1 年間に平均 80 ～ 90 例と全国最多の手術件数となっています。先進的医療としては、唾石の治療として sialendoscopy（唾液腺内視鏡）に取り組んでいます。耳および鼻副鼻腔疾患については、中耳炎に対する鼓室形成術や真菌やアレルギーに伴う特殊な病態（好酸球性副鼻腔炎など）の治療成績が良好です。他に専門外来として、アレルギー、補聴、口腔乾燥、味覚外来があり、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）の改善を重視した最善の治療を目指しています。

放射線腫瘍科 Department of Radiation Oncology

放射線腫瘍科は年間約 700 人の悪性腫瘍患者さんの放射線治療を行っています。対象疾患は脳腫瘍、頭頸部腫瘍、肺癌、食道癌、乳癌、前立腺癌、子宮頸癌、膀胱癌、直腸癌、悪性リンパ腫など多岐にわたっています。治療機器として外部照射用高精度リニアック 3 台（1 台はコンビーム CT つき）、腔内ならびに組織内照射のためのイリジウムリモートアフターローディングシステム 1 台、X 線と CT が一体化した位置決め装置 1 台が導入されています。また、高精度放射線治療として肺癌などに対する定位放射線治療や、脳腫瘍、頭頸部腫瘍、前立腺癌、食道癌、肺癌、膀胱癌などに対する強度変調放射線治療、画像誘導放射線治療を積極的に実施しています。当科の特徴は、神経腫瘍、小児脳腫瘍に対する放射線治療の患者数が日本で最多の施設であること、前立腺癌に対して強度変調放射線治療ならびに放射性ヨウ素の永久挿入法を実施できること、乳癌に対する寡分割法などの多様な選択肢を用意していること、粒子線治療のコンサルタントができることです。

画像診断・核医学科 Department of Diagnostic Imaging and Nuclear Medicine

画像診断・核医学科は、従来の放射線科業務の3本柱である、画像診断、核医学、放射線治療の中の、画像診断と核医学を受け持つ診療科です。画像診断では、単純X線撮影、マンモグラフィ、CT、MRIの読影や、超音波や血管撮影の検査および診断を行っています。また、CTや超音波検査を用いた細胞診や組織診と腫瘍ドレナージに加え、血管内治療などのインターベンショナルラジオロジー（IVR）も担当しています。核医学では、昔から広く行われている骨シンチ、ガリウムシンチなどの一般核医学から、SPECTによる心臓や脳神経の機能診断、PETを用いた分子イメージングを担当しています。さらに放射性同位元素（RI）を用いた治療では、ヨード（I-131）によるバセドウ病や甲状腺癌の治療、ストロンチウム（Sr-89）によるがん骨転移の疼痛治療、ゼバリン（Y-90）による悪性リンパ腫の治療を、各診療科と連携して行っています。以上のような業務に対し、診療放射線技師や看護師とも連携し、チーム医療を実践し、専門性が高くかつ安全な医療の実現に努めております。

麻酔科 Department of Anesthesiology

病気の中には、手術を受けて治療をすることが必要な場合があります。その時に、どうしても手術の際の「痛み」を取り除く必要があります。現在の麻酔科は、「痛み」に加えて手術によって身体に加わるストレスを全て取り除く技術と知識を駆使して患者さんに最もよい状況で手術を受けてもらえるように対応する科です。たとえ心筋梗塞後で胃の手術を受ける場合にも、その心臓合併症に影響が最小限になるように、全身管理を麻酔科が提供致します。人口の高齢化と共に、手術をする臓器、部位以外に様々な余病をお持ちの患者さんが増えてきています。手術中にその余病の臓器がどうなってしまうのか？そんな心配は、麻酔科の周術期外来のお越し下さい。患者さん皆さま個人の状況に合わせて対応致します。

麻酔科では、これら手術中の急性痛に対する全身麻酔・全身管理ばかりではなく、ペインクリニックではヘルペス後、神経痛をはじめとした慢性疼痛治療を行っております。

歯科口腔外科 Department of Oral Surgery and Dentistry

歯科口腔外科では歯、口、顎骨の疾患の診断と治療を行っています。心臓病、糖尿病、腎臓病、血液疾患などの患者さんの抜歯などは院内他科と連携し行っています。特にワーファリンなどの抗凝固薬、アスピリンなどの抗血小板薬による経口抗血栓療法中の患者さんの抜歯は薬を中止することなく行なっています。また安全のため入院して抜歯することもあります。親知らず（智歯）の抜歯や歯根のう胞の摘出手術などは外来で口腔外科専門医が安全に行います。顎関節症、歯や口の中の外傷、顎の骨折、歯が原因の炎症、口や顎の腫瘍、口腔癌の診断と治療を専門医が行ないます。口腔癌の治療は形成外科、放射線腫瘍科、化学療法・緩和ケア科など院内各科と連携をとって治療にあたっています。歯科矯正は矯正歯科専門医が行なっており顎の変形などは手術を併用して治療いたします。歯科インプラント（人工歯根）による治療も行っています。また当院睡眠科と連携し睡眠時無呼吸症の治療のための口腔内装置の作成を行っています。

総合診療科 Department of General Medicine

どこの診療科で診察を受ければよいかわからない症状（発熱、胸痛、だるさ、生活習慣病など）の成人を診察します。多くの場合は当科で治療して終了になります。さらに高度な診察が必要な場合は学内の専門診療科に紹介します。また慢性疾患の継続的な管理や治療については、患者さんと相談し地域の医療機関や学内の該当する診療科に紹介いたします。

急性疾患（急な発熱、ひどい腹痛など）については必要な検査を当日中に済ませ、必要な場合に専門診療科へ紹介することを可能にするため、午前中の早い時間に受診なさることをお勧めします。その際に診療情報提供書（紹介状）や検査結果、薬の情報などをぜひお持ちください。

リハビリテーション科 Department of Rehabilitation Medicine

各科からの依頼により、入院患者と外来患者さんに対して病気やケガにより生じた障害の治療を行っています。リハビリテーション科医、理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）のチーム医療で、機能障害や能力低下をできるだけ軽減し、患者さんが元の生活にできるだけ近い形で復帰できるように依頼科とも連絡をとりながら進めています。リハビリテーション科医師による診察・障害の評価の後、理学療法（筋力強化、基本動作訓練、歩行訓練など）、作業療法（上肢の機能訓練、日常生活動作訓練、認知機能訓練など）、言語療法、嚥下訓練などの治療、生活指導、家族への介助指導などを行っています。当院の特徴は急性期の患者さんに対してICUやベッドサイドよりリハビリテーションを開始していることです。また、神経や骨関節の病気だけでなく、循環器や呼吸器、ガンなど多種にわたる病気に対して治療を行っています。重症の患者さんも多いため、リハビリテーション中のリスク管理には特に注意を払っています。

病理診断科 Department of Sueginal Pathology

病理診断科は以下の業務を通じ、女子医大病院の医療に貢献しています。

1. 組織診断：生検または手術によって採取される組織を肉眼および組織学的に検討し、診断を行います。年約15,000件。一部の症例では最適化・個別化医療のため、症例ごとに分子標的治療の適否を検討しています（コンパニオン診断）。
2. 細胞診断：喀痰、尿、甲状腺や乳腺腫瘍などから採取される細胞を検討し、疾患の推定診断を行います。年約8,000件。
3. 術中迅速診断：手術中に採取された組織や細胞から標本を作製、検体提出後15-20分のうちに診断を行います。年約1,000件。
4. 各診療科との症例検討会や研修医教育プログラムへの参画（特に全学臨床病理症例検討会の運営）。これらの業務を通じ、病理専門医、細胞診専門医、細胞診断士を育成します。また臨床病理学的研究を推進し、各診療科や初期研修医、学生からの学会、論文発表などの学術的発信を支援しています。

化学療法・緩和ケア科 Department of Chemotherapy and Palliative Care

化学療法・緩和ケア科は、がんや肉腫など、あらゆる悪性腫瘍の患者さんを対象とし、化学療法（抗がん剤治療）や症状緩和治療、緩和ケアを行う科です。積極的ながん治療と緩和ケアの両方を専門とし、同時に実践しております。ひとつの臓器のみを対象とする診療科とは異なり、がんや肉腫、重複癌や原発不明癌などのまれな疾患にも対応し、最新の知見に基づいた抗がん治療を積極的に進めて行っております。標準治療はもちろん、合併症のある患者さんなど、個々の患者さんの特性に合わせて、抗がん治療の効果を最大限に得られるよう、副作用を最小限に抑えるよう常に配慮して治療を進めていきます。また、緩和ケアは末期の患者さんだけの治療ではありません。症状緩和治療、緩和ケアを早期に始めて、がんによる身体的・精神的な苦痛を可能な限り軽くしながら、同時に積極的な抗がん治療を行うことが現代のがん治療のスタンダードです。病気が進行してしまった患者さんに対して、根治や病勢を抑えることを目指す治療ができなくなったとしても、その状態から患者さんのために何ができるのか、患者さんが何を治療の目標とするのかを共に考え、道しるべとなるように、他科の医師や看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、地域の医療スタッフなどとチームで対応していきます。

リウマチ科 Department of Rheumatology

関節リウマチ、膠原病、痛風をはじめとしたリウマチ性疾患の患者さんを国内で最も多く診療している、東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センターの病棟部門です。リウマチ内科とリウマチ関節外科で1つの科を形成しています。リウマチ性疾患全般を対象としており、内科的治療としては最新の薬物療法を網羅し、合併症治療も含めて全人的医療を行っています。必要な症例については、手術や理学療法も行っており、年間で数百例の関節外科手術を行い、関節リウマチに対する手術件数では全国1位にランクされています。2013年から小児リウマチ医も常勤し、外来を中心に診療しています。また、国内最大規模の施設の使命として外部の医師を対象としたセミナーの定期的開催など、若手リウマチ医の教育・育成にも積極的に取り組んでいます。豊富な症例を背景とした臨床・基礎研究も活発に行い、国内屈指の業績を挙げ続けています。なお、外来患者さんについては、附属膠原病リウマチ痛風センターの新患外来を予約・紹介ください（完全予約制）。転入院については、ベッドコントロール医に直接ご連絡ください。研修・見学の希望も随時受けつけておりますので、医局長までご連絡ください。

睡眠科 Division of Comprehensive Sleep Medicine

当科の前身は、東京女子医大附属青山病院睡眠総合診療センターで、2010年より睡眠時無呼吸症候群を中心とした睡眠呼吸障害、むずむず脚症候群、レム睡眠行動障害、ナルコレプシーなどの過眠症、不眠症などの睡眠障害の検査、診断、治療を行ってまいりました。

近年、24時間社会、IT化がすすみ、また食の欧米化、運動不足などライフスタイルの変化により、不眠、睡眠覚醒概日リズム障害、睡眠時無呼吸症候群などの睡眠障害をきたす患者さんが増えています。

睡眠障害は、事故やヒューマンエラーなど社会的問題、うつなどの気分障害、生活習慣病と密接に関係し、総合的、専門的に診断、治療していくことが重要です。当科では、睡眠医療、循環器内科、呼吸器内科、精神科の専門医が診療にあたり、歯科口腔外科、耳鼻科、神経内科など多数の診療科と連携をとりあっています。

入院検査では、終夜睡眠ポリグラフィ検査（PSG）、昼間の眠気を客観的に評価、検査するMSLT（反復睡眠潜時検査）を施行いたします。

閉塞性睡眠時無呼吸症候群では、持続陽圧呼吸（CPAP）の導入、定期通院や歯科口腔外科での口腔内装置による治療をおこなっています。

睡眠に関する悩みがあればお気軽にご相談ください。毎日初診を受けておりますが、初診、再診ともに完全予約制になっておりますので、初診・再診ともに当院予約センターまでご連絡ください。睡眠検査入院をご希望の場合も、まず初診外来で承ります。

心臓病センター The Heart Institute

循環器内科 Department of Cardiology

虚血性心疾患、不整脈、心筋症、心不全、弁膜症および大血管疾患など、循環器疾患に対する最先端の診断・治療を行っています。1967年にわが国で最初に創設された冠動脈集中治療室（CCU）では、現在は虚血性心疾患の治療にとどまらず、心臓移植を視野にいれた重症心不全の治療に精力的に取り組んでいます。心筋梗塞や狭心症に対する最先端の心臓カテーテル治療に加え、下肢を中心とした全身の血管に対してのカテーテル治療も積極的に進んでおり、全体での症例数は700例を超えています。不整脈領域では、頻脈性不整脈に対するカテーテルアブレーションは年間約400例、また心臓ペースメーカー・植込み型除細動器（ICD）・重症心不全に対する心臓再同期療法機能付植込み型除細動器を用いた治療も総計で約300例を数えます。冠動脈疾患、不整脈、心不全、弁膜症、大血管疾患、人工弁、先天性心疾患などの専門外来と併せて、常に日本で最高の医療を提供することを目指して、患者のための全人的医療に取り組んでいます。

心臓血管外科 Department of Cardiovascular Surgery

当科は1955年に開設された本邦最大級の診療科で、現在心臓血管外科専門医13名が診療に当たっています。2015年までに心臓大血管手術数が通算37,000例を超えました。虚血性心疾患・大血管疾患・弁膜症・不整脈・重症心不全先天性心疾患の各領域に高度な技術と経験を有する専門医を揃え、内科・小児科・麻酔科医師・臨床工学技士・看護師と密接に連携し、良質で安全なチーム医療に取り組んでいます。当科は心臓移植認定施設、植込み型補助人工心臓認定施設であり、その他自己組織による再生医療、弓部大動脈瘤の低侵襲ステントグラフト治療などの高度先進心臓血管外科治療も多数実施しています。外来は専門外来が整備され、手術に際しては十分なインフォームドコンセントを行い、セカンドオピニオンにも積極的に対応しています。

循環器小児科 Department of Pediatric Cardiology

胎児、新生児、小児から成人までの先天性心疾患に対する最先端の診断、治療を行っています。その診断、治療レベルは日本で最高のもとなっています。小児の不整脈、成人の遺伝性不整脈、小児の心筋疾患、川崎病、肺高血圧症に対する最先端の診断、治療も進んでいます。胎児の心臓検診（胎児診断）や心疾患のある母胎の診療も進んでいます。また小児と成人に対するカテーテル治療の数と治療成績は世界でも有数の施設のひとつとなっています。小児の不整脈や先天性心疾患に合併した小児や成人の不整脈に対するカテーテルアブレーションも日本で最高の成績をあげています。心臓血管外科や循環器内科と密接に連携して、高度な、しかも安全な医療を提供しています。未熟児で先天性心疾患がある場合には、母子総合医療センター新生児部門（NICU）と協力して治療を行います。先天性心疾患成人で、妊娠されたご婦人の場合も母子総合医療センター母性部門と協力して、妊娠と分娩について最良の医療を提供します。外来は予約制を整備し、常に患者サービスの向上に努めています。

消化器病センター Institute of Gastroenterology

消化器内科 Department of Medicine

消化器内科は、食道、胃、十二指腸、小腸、大腸、肝臓、胆嚢、膵臓のすべての消化器疾患の内科診療を担当しています。消化器疾患の予防、診断、治療などの内科診療とともに、病気の成因や病態の解明のための基礎的な研究から新しい診断法や治療法の開発などの研究まで幅広く取り組んでいます。診療チームは食道・胃・十二指腸・小腸（上部消化管）、大腸、肝、胆・膵と大きく4つに分かれ、それぞれの分野の専門医がチームとなって患者さんの診療にあたっています。いずれの診療チームにも経験豊富な学会専門家が多数そろっております。最近では、胃癌、肝臓癌などの悪性疾患も内科的治療が可能となりました。胆石治療や胃潰瘍出血なども内視鏡治療が主役です。これらの治療にあたる当科医師は、常に最新の技術を習得したトップレベルの医師達です。劇症肝炎、重症急性膵炎などの重篤な病気の治療経験も豊富で、多くの患者さんを救命しています。肝移植の適応検討も行っています。治療の選択肢が増えた現在、当科では個々の患者さんに応じたオーダーメイド治療を提供しています。

消化器・一般外科 Department of Surgery

消化器病センター外科では、臓器別グループにて診療がなされており、症例数、切除成績とも日本のトップレベルです。消化管グループは、食道外科、胃外科、下部消化管グループがあり、診断から治療まで一貫して担当しております。食道外科では、放射線科と協力のもと、化学放射線治療も行っております。また、最近では、内視鏡的粘膜切除や腹腔鏡補助下胃切除や結腸切除の症例数が増加してきており、患者さんにあった低侵襲の治療が選択されています。肝胆膵外科グループでは、高難度の手術が数多く行われております。最近では術後の合併症も少なくなり、高難度手術も安全に施行できるようになりました。また、化学療法や免疫治療の専門家が外科医とともに働いていることで、術後の補助療法や、再発例・切除困難例に対しても積極的な治療が行われています。心臓や腎臓など他臓器に障害があり、他病院では手術困難な症例に対しても、慎重に全身状態を評価のうえ安全に手術が行われています。これは、他診療科、麻酔科、看護師も含めた女子医大病院の総合力の高さのためと思われます。患者さんの病態に応じた総合治療を行うことができることが消化器病センター外科の特徴です。

消化器内視鏡科 Department of Endoscopy

消化器病センター消化器内視鏡科は、診療支援部門として消化器内視鏡検査による診断と治療を行っています。消化器内科、外科の医師と連携し、上部消化管（食道・胃・十二指腸）内視鏡検査は年間11,000例、大腸内視鏡検査は5,500件、内視鏡的胆膵管造影検査（ERCP）600例ほか、小腸内視鏡検査（カプセル内視鏡を含む）や超音波内視鏡検査も多数行っています。治療内視鏡はポリープや早期癌の内視鏡的切除術、食道胃静脈瘤の硬化療法や結紮術、総胆管結石の採石術などを中心に年間約1,000例の実績があります。当院の症例数は国内有数であり、画像強調観察などの最新機器を導入し、迅速で正確な診断を行い、病態に応じた適切な治療を選択しています。特に重症例や治療困難例の紹介患者さんも多く、各分野の専門家が、その経験を生かし診療に従事しています。また、内科、外科およびメディカルスタッフと連携し、チーム医療を推進し、安全で質の高い内視鏡診療をモットーに診療にあたっております。

脳神経センター Neurological Institute

神経内科 Department of Neurology

神経内科は脳、脊髄、末梢神経、筋肉の病気を対象としています。症状としては頭痛、めまい、しびれ、歩行障害、ふるえ、物忘れ、言語障害、意識障害などがあり、主な病気には脳卒中、パーキンソン病、アルツハイマー病、てんかん、片頭痛、多発性硬化症、筋萎縮性側索硬化症、末梢神経障害、筋炎、脳炎、髄膜炎、脊髄炎などがあります。女子医大の神経内科は全国の大学病院の中でも最も多くのスタッフが最も多くの患者さんを診察しており、神経内科専門医と脳卒中専門医の数は全国有数を誇っています。脳卒中、神経心理、神経免疫、神経生理、神経病理などの研究グループは全国でもトップクラスの研究成果と診療実績を誇っており、特定の分野に片寄らない、オールラウンドな診療を特徴としています。多くの大規模臨床試験で主導的な役割を果たしており、診断や治療が困難な神経疾患について多くの紹介があり、先進的な検査や治療に取り組んでおり、さらなる診療成績の向上を目指しています。

脳神経外科 Department of Neurosurgery

脳神経外科では最先端の診断治療機器と治療方法を導入し、全国有数の症例数の治療を行っています。すなわち小児から高齢者、脳腫瘍、脳血管障害、脳機能疾患、小児脳神経外科、ガンマナイフ、血管内治療などの広い領域で診療しています。各専門分野は充実しており迅速な対応と適格な治療を推進しています。特に脳腫瘍に対しては手術室にMRIを導入し手術の進展とともにMRI検査を行い、機能温存を図りながら最大限の摘出を行っています。また脳動脈瘤、閉塞性脳血管疾患などに対しても血行再建術（Low flow bypass, High flow bypass, CEA など）に独自の手術手技を導入し良好な結果を得ています。特にもやもや病に対しては新たなバイパス手術も開発しています。良性脳腫瘍に対しても術中モニタリングを駆使した外科的摘出による安全で確実な治療を実現しています。機能外科においてはジストニア、パーキンソン病などに対し最先端治療を進めています。ガンマナイフ治療では難治性疼痛、脳機能障害、てんかんなどにも応用を図っています。研究に関しては先端生命医学研究所や基礎教室などとの連携を図り、再生医療、脳虚血の病態解明、悪性脳腫瘍の病態解明、良性脳腫瘍の境界領域の病理組織学的検討、各疾患の遺伝子の解明などを行っています。

腎臓病総合医療センター Kidney Center

腎臓内科 Department of Medicine

当科は『患者さんとともに』を基本として日々の診療に励んでおります。診療内容は主に腎炎、ネフローゼ症候群、腎不全などの腎疾患全般および膠原病や高血圧症の診断・治療です。腎生検を積極的に施工し、治療方針の決定を行っています。また、血液透析、CAPD（持続腹膜透析）を含めた透析全般にわたる診療を担当しています。透析施設との病診連携を重視し、慢性腎臓病の合併症の評価と治療方針の決定に協力しています。遺伝性疾患として多発性嚢胞腎の専門外来を開設し、遺伝相談を行い、新規治療を紹介しています。その他、体液・水・電解質の異常にかかわる患者さんも診察しています。最近では、腎移植ドナーおよび移植後の腎障害の診断・治療も行っております。セカンドオピニオン外来を開設し、治療方針の決定が困難なケースにも対応しています。

腎臓外科 Department of Surgery

当科は第一に「患者様本位の医療」を心がけております。主な診療内容は、1) 腎臓、肝臓、膵臓などの臓器不全に対する臓器移植、2) 血液透析に必要なバスキュラー・アクセス手術、腹膜透析に必要なペリトネアル・アクセス手術、バスキュラー・アクセスに対する経皮的血管形成術（PTA）、3) 末期腎不全患者様における副甲状腺機能亢進症や消化器外科的疾患に対する外科的治療、4) 血液浄化療法、5) その他の一般外科です。腎移植は年間100例前後、バスキュラー・アクセス手術は年間700例前後、経皮的血管形成術（PTA）も年間800例前後、また膵移植（主に膵腎同時移植）は年間5～8例施行しています。さらに肝移植もこれまで90例以上を経験しています。特に生体腎移植は、ドナー様に低侵襲で安全な鏡視下腎摘術を900例以上施行し、レシピエント様にも最新の免疫抑制療法を駆使し、血液型が違ったり白血球の相性が悪いケースにおいても良好な成績をおさめています。いずれの領域でも最高の医療が提供できますよう日夜研鑽に励んでおります。

泌尿器科 Department of Urology

当科は腎移植を主体とした腎不全治療、腎臓癌・前立腺癌（前立腺腫瘍センター）、膀胱癌などの泌尿器科腫瘍、女性排尿障害センター、小児泌尿器疾患、尿路結石（尿路結石センター）などの専門外来を中心に診療を行っています。腎移植の成績は世界でもトップレベルであり、10年生着率は90%を超えつつあります。泌尿器科チームとして150例近い腎移植を行っており、世界的にも有数の腎移植チームとして認められています。腎癌症例では手術困難といわれたような患者さんも高度の手術技術を駆使して癌の切除に成功しています。またこれら専門外来だけでなく前立腺肥大症、尿路感染症などの泌尿器科全般にわたる診療も行っています。前立腺腫瘍センターでは前例をダビンチによるロボット手術にて行っており、腎癌の部分切除は原則ロボット手術になっており、近々膀胱癌についてもロボット手術になる予定です。放射線科と協力して患者さん毎にベストとなる治療法を提示しております。また、進行した癌に対する免疫療法も行っており多様化した患者さんのニーズに対してベストオプションとなる医療を提供しております。常に時代の最先端を行く研究を行っており診療にもこれを反映させ世界的にもトップレベルの医療を提供しています。

腎臓小児科 Department of Pediatric Nephrology

当科は、先天性腎路疾患から腎炎・ネフローゼ症候群、そして急性・慢性腎不全まであらゆる小児期腎臓病を診療しています。小児腎臓病診療には、さまざまな職種で医療従事者が力を結集して対応するチーム医療が必要不可欠です。当科は、東京女子医大病院内の腎臓病総合医療センターの診療科（泌尿器科、腎臓外科、腎臓内科、血液浄化療法科）や小児総合医療センターの診療科（小児外科、小児科、循環器小児科、新生児科）、さらに同病院内の種々の部門と緊密に連携できる環境に恵まれています。腎生検は年間約60～80例（固有腎20～30例、移植腎40～50例）行っており、高度で専門的な小児腎臓病治療として、腹膜透析導入を5～10例/年、維持血液透析導入を5例/年、そして腎移植を15例/年程度施行しています。血液型不適合例や巣状分節性糸球体硬化症といった、特別な処置を要する腎移植についても豊富な経験を有しています。それとともに、小児腎臓病の新たな治療法の開発につながる基礎研究にも力を注いでおり、さらなる診療水準の向上に努めています。

血液浄化療法科 Department of Blood Purification

血液浄化療法は、血中から人体に有害な物質（尿素・アンモニア・免疫複合体・過剰リポ蛋白、エンドトキシン等）を体外へ除去し、重篤な病態の改善を図る治療法です。末期腎不全に対して血液透析、血液濾過透析、連続携行式腹膜透析、敗血症に対する血液吸着、免疫異常に対する血漿交換など多岐にわたる治療に取り組んでいます。透析ベッド52床、3交代と大学病院に付属する透析室としては、最大規模で、透析室の常勤医師は10～12人、看護師17人、臨床工学技士は28人と豊富なスタッフをそろえています。我が国の透析の黎明期から先駆的な役割を担い、血液浄化療法全般の教育・研究施設として、日本国内だけでなく、海外からも見学、研修にきています。透析の診療実績では、年間に外来約400人、入院1200人の透析患者さんがおいでです。新規の透析導入は100人超で、外来維持透析においての患者さんおよび他診療科の患者さんの問題点のdiscussionや診療方針の検討を行っています。さらに腎臓病総合医療センターの一員として、保存期慢性腎臓病の診療から、移植、医工学にもスペクトラムを広げて視野の広い医師、スタッフが集まり、さらにその育成に努めています。私たちはすべての腎関連疾患に対して集学的医療による克服を目指しています。

糖尿病センター Diabetes Center

糖尿病・代謝内科 Department of Diabetology and Metabolism

糖尿病患者さんのトータルケアを目指して設立された、世界でも類をみない最大級の糖尿病センターの内科部門です。1975年以来、糖尿病診療のサブスペシャリティ化の取り入れ、チーム医療の先駆的取り組み、若年から高齢者まで一貫した、患者さん中心の糖尿病診療をおこなっています。

外来では糖尿病一般外来のほか、小児・ヤング、腎症（CAPD 外来も含む）、神経障害、妊娠、フットケア、脂質異常症、肥満、神経障害などの専門外来があります。透析ユニット5床を含む病棟では、糖尿病発症間もない幼児から大人の糖尿病教育、糖尿病合併妊婦や透析導入、足壊疽治療ま様々な糖尿病患者さんの治療を行っています。どのような糖尿病患者さんであっても暖かく受け入れ、医師、コメディカルスタッフ一体のチーム医療で教育・治療、重症合併症に苦しむ患者さんに、全力を挙げて取り組んでいます。特に、糖尿病網膜症の手術治療のために糖尿病センター病棟に入院される時は十分な内科管理の下に眼科医による治療が行われます。足壊疽治療にも他科と密着したチーム医療にて濃密な治療が行われます。この点が他にはみられないユニークな総合的かつ多角的治療をおこない、どんな多彩な合併症があってもすべてに対応して治療いたします。

糖尿病眼科 Department of Diabetic Ophthalmology

糖尿病センターの眼科部門であり、外来・病棟ともに内科と一体となり、網膜症、白内障、緑内障などの糖尿病患者さんの眼合併症の治療に取り組んでいます。

外来では、電子カルテとともに画像ファイリングシステムを導入して、蛍光眼底造影やOCT（光干渉断層装置）などの最新の検査機器のデータを瞬時に取り出して、詳細な病状を説明することができるようになりました。網膜症に対する治療も、ステロイドや抗VEGF薬の注射を併用する最新の治療法を積極的に取り入れていきます。特に、硝子体手術では、最新の照明装置や内視鏡を用い、生体への侵襲や患者さんへの負担が少ない、25ゲージ・システムを用いた小切開硝子体手術を導入して、より安全で確実な手術治療を実践しています。

内分泌疾患総合医療センター Institute of Clinical Endocrinology

高血圧・内分泌内科 Department of Endocrinology and Hypertension

我が国有数の内分泌疾患総合医療センターの内科部門が高血圧・内分泌内科です。日本に4,300万人いる高血圧疾患と希少な内分泌疾患の両方を扱っています。高血圧疾患においては①高血圧になってしまった原因の精査、②家庭血圧や24時間血圧の評価、③全身の動脈硬化の評価、④薬物治療だけではない最新の高血圧治療の提供、を行っています。また、「脳卒中や心筋梗塞を決して引き起こさせない」ことを目標に、血圧をコントロールするだけでなく、「高血圧を治し」一生の間薬を飲み続ける必要がなくなるための研究と治療を行っています。内分泌疾患においては、先端巨大症や悪性褐色細胞腫などの下垂体・甲状腺・副甲状腺・副腎・膵臓に発生する疾患や腫瘍が主な対象ですが、成長障害、骨粗鬆症、肥満症などの新しいホルモン関連疾患も、経験豊富なスタッフが診療しています。外来では、超音波検査室、負荷試験室を備えて高血圧と内分泌疾患の早期診断と治療に努めており、病棟では内科と外科が協力して治療にあたり低侵襲治療を実践しています。

母子総合医療センター Maternal and Perinatal Center

母体・胎児医学科 Maternal-Fetal Division

母体の重症例を扱う総合周産期医療センターの中で、ハイリスクの母体・胎児の管理が可能なMFICU（母体・胎児集中治療室）の分野を担当しています。重症例に対しては、関連各科と密接に連携しながら、内科的・外科的合併症を有する妊婦、前置胎盤などの産科合併症、また早産児出生・胎児異常が予想される分娩などあらゆる母体・胎児合併症に対応できる体制がとられています。

全ての分娩において高い満足度が得られるよう、助産師を含めたスタッフが一致協力して、診察にあたっています。麻酔科と協力して無痛分娩の要望にもお応えしています。さらに、母乳哺育の推進や育児相談にも積極的に対応しています。

新生児医学科 Neonatal Division

周産期医療のなかで新生児疾患の治療を受け持ちます。新生児疾患としては、早産児を始め、出生時の適応障害を起こした児、母体合併症の影響を受けた児、先天異常を有する児、等の多くが含まれるため、全ての疾患の治療に対応できる新生児集中治療室（NICU）が当センター内に整備されています。NICUは、18床あり、全国的にも大規模な新生児医療施設で、総合周産期母子医療センターに指定されています。

また、世界的にもレベルの高い施設として知られています。NICUは、重症の新生児の治療が可能な高度専門医療施設として院内出生時および院外からの紹介症例に、24時間対応しています。一方、新生児医学科はNICUでの集中治療のみでなく、比較的低リスクの低い新生児の生後の管理を行い、出生後の適応現象に問題がないかを確認して、新生児を家庭に帰しています。新生児期は人生のなかで一番不安定です。この時期を大きな問題なく経過できるように最大限サポートするのが新生児医学科の最大の目標です。

呼吸器センター Chest Institute

呼吸器内科 Department of Medicine

咳や痰、息切れや呼吸困難などの症状のある患者さんや、胸部X線写真で異常を指摘された患者さんを担当しています。当科が担当する臓器である肺には、感染症、悪性腫瘍、アレルギー、免疫異常など実に様々な病気があり、とくに近年の生活環境の変化や人口の高齢化から、気管支喘息、慢性閉塞性肺疾患（COPD）、肺癌などが増加の一途をたどっています。当科では気管支喘息、COPD、肺癌、肺炎、間質性肺炎、呼吸不全、睡眠時無呼吸症候群など、あらゆる呼吸器疾患の診断、治療を行っています。

各呼吸器疾患の専門医が呼吸器外科医や放射線科医と密接に連携し、高度で安全・安心な診療を行う万全の体制をとっています。また、ピークフローメーターを用いた喘息管理指導、重症喘息に対する気管支熱形成術、禁煙外来、呼吸リハビリテーションなどを通じて予防医学・管理医学の充実を図り、在宅酸素療法や在宅レスピレーター療法など慢性呼吸不全に対する在宅医療ネットワーク作りにも力を注いでいます。

呼吸器外科 Department of Surgery

肺癌、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、気胸、膿胸、肺嚢胞、漏斗胸などの呼吸器外科的疾患全般について呼吸器内科と連携して手術、診療を行っています。肺癌手術についてはその9割以上を低侵襲な胸腔鏡下に行っており、特に早期肺癌に対しては、標準術式である肺葉切除術の他に当科で開発したソフトウェアで構築した3次元画像を用いた正確な胸腔鏡下区域切除、亜区域切除を積極的に行っています。また転移性肺腫瘍に対しては複数の区域、亜区域切除を自在に組み合わせることで、両肺多発症例に対しても肺機能を温存した切除が可能となっています。また、心疾患、腎障害、糖尿病、間質性肺炎などの合併症を持つ方に対しては根治性を考慮した縮小手術を、局所進行病変に対しては拡大手術を必要に応じ選択しています。

2012年より、早期肺癌と縦隔腫瘍に対してロボット支援装置（Da Vinci S Surgical system®）を用いた手術も導入しています。

救命救急センター Critical Care and Emergency Medical Center

当センターは、厚生労働省指定の三次救命救急センターです。東京消防庁、近隣県の消防署、他院からの三次救急患者さんを24時間365日、疾患を問わずに受け入れております。心肺停止状態、多発外傷、多臓器不全、脳血管障害、ショック、重症中毒など、緊急度が高く、重症度が高い患者さんが対象となります。高度先進医療と専門性の高い院内各科が揃っていますので、他科との連携により、特殊疾患やどのような基礎疾患をお持ちの患者さんの急変に対しても対応が可能です。センター内には、専従の救急医療専門医、集中治療専門医、外科専門医、脳神経外科専門医、整形外科専門医のみならず臨床工学技士、臨床検査技師もあり、急性血液浄化療法、体外循環、脳低温療法、高気圧酸素治療など、ICUでは、高度な集中治療を提供しております。ICU退室後の専用の一般病床も有しており、一貫した治療が継続できます。東京DMAT、日本DMATにも加入しており、事故や災害医療への対応も備えております。

がんセンター Cancer Center

高齢化社会の訪れとともに、わが国ではがん患者数が急速に増加していますが、21世紀型のがん医療は個別化を尊重する医療が中心になることが予想され、もはや医師個人や診療科単位での対応は困難です。がんセンターはこれまでも当院で脈々と行われてきた良質のがん医療を、さらに高い次元に推し進め、学内横断的ながん診療、がん研究へと発展させていくために設立された全学的な組織ですが、当院は最先端のがん医療の実践のみならず、がん患者さんやご家族にわかりやすく、より親しみのある全人的ながん医療の提供を心がけています。常に『患者さんのために何ができるか、どこまでできるか』という問いかけを持ち、基本理念である「至誠と愛に基づく全人的ながん医療」の実現に向けて、医師のみならず、看護師・薬剤師・臨床心理士・ソーシャルワーカー・栄養士など、様々な分野の専門職種がチームを組んで、全力でがん患者さんをサポートいたします。

小児総合医療センター TWMU Children's Medical Center

小児医療を巡る社会的ニーズの高まりに応え、小児関連診療科である、小児科、母子センター新生児医学科、循環器小児科、腎臓小児科、小児外科、脳外科小児グループ、心臓血管外科小児グループ、泌尿器科小児グループ、外科系関連科小児グループ、遺伝子医療センターによる横断的診療組織として2010年に設立されました。このセンターでは、関連する診療科が、その専門性を生かしながら、幅広い視点に立った全人的な総合診療を提供することを目的としています。これらの診療は、医師だけでなく、看護師、薬剤師、臨床心理士、理学療法士、ソーシャルワーカー、病棟保育士、事務職など各専門職をメンバーとしたチーム医療で支えられています。

社会支援部 Social Support Department

社会支援部には、退院調整看護師 / ソーシャルワーカー / 地域連携担当が所属し、患者さんやご家族の安心につながる療養環境の支援と、地域の医療・福祉機関の相談窓口として、活動を行っています。これからも各職種の専門性を発揮し、一層取り組んでいきます。

退院／転院調整について

診療科の医師・看護師と連携し、退院に向けて医療処置の簡便化を図り、病状と介護力に応じて、介護サービスの調整や在宅医療の医師・看護師と連携を図ります。転院においては、患者さんご家族の希望を踏まえ、病状と病院機能に合わせた病院と連携を図ります。

福祉／制度について

傷病によって生じる心理・社会的問題、経済的問題にソーシャルワーカーが担当し、社会保障制度・福祉制度等の紹介、就労・就学等の相談に対応致します。患者さんやご家族にとって安心な療養環境や社会生活となるよう取り組んでいきます。

地域連携について

当院と地域の医療機関やかかりつけ医の先生方との連携の窓口として、外来診療やセカンドオピニオン外来の予約、診療情報提供書の発送業務を担当します。また、地域連携のクリティカルパスの窓口を担当します。

中央検査部 Central Clinical Laboratory

中央検査部は心機能検査、超音波検査、脳波・節電図検査、呼吸機能検査および内視鏡検査などを行う生理検査部門と血液、尿などの体液や分泌物に含まれる生化学的成分、免疫血清学的成分および微生物、血液細胞、尿中細胞などの形態学的検査を行う検体検査部門及び採血部門で構成されています。当部は総合外来センターに位置し、患者さんが安心して検査を受けられるよう患者サービスに努めるとともに、各検査分野での認定資格の取得等に力を入れて専門性の高い技師育成に努め、より質の高い検査データの提供を行っています。さらに、検体検査においては診療前検査における検査項目を充実させ、迅速な検査結果の返信により、診療部門の診断・治療を遅延なく行うための重要な役割を担っております。また、高度検査技術を提供することを目的として、地域医療機関を対象とした生理検査を行う「生体生理検査センター」を開設し、幅広い検査技術の提供に努めています。検体検査室は、2010年3月に国際標準化機構の国際規格ISO15189を取得しています。

中央放射線部 Department of Radiological Services

中央放射線部は、高度な画像診断と放射線治療を行うために、多くの大型放射線関連機器を揃えた我が国固有数の放射線診療部門です。

現在画像診断のための関連機器は、320列MDCTを含む8台のCT装置、MR装置は3Tを含む6台、PET/CT、SPECT/CT・SPECT合計6台、心臓カテーテルなどの経皮的に診断・治療を行う血管造影装置は8台、他には乳がんの早期発見のためにマンモトーム、トモシンセシス等を装備した多機能透視装置などが稼働しています。

放射線治療については、高精度の強度変調放射線治療が可能なCT搭載のライナックなど3台、腔内照射装置とガンマナイフ、10台を超える放射線治療計画装置が活躍しています。

近年急速に進歩する画像診断技術や放射線治療技術をいち早く取り入れて日常の先端医療に結び付けていくためには、中央放射線部の画像診断・放射線治療の専門医、診療放射線技師、医学物理士、専門看護師だけにとどまらず、各部門との連携が何より重要です。

あらゆる専門性を取り入れた“協調によるチーム医療”をモットーに、中央放射線部の診療体制を更に整えてまいります。

臨床工学部 Department of Clinical Engineering

病院にはさまざまな医療機器があります。それには輸液ポンプやシリンジポンプなど、多くの患者さんに使用されるものから、人工呼吸器、透析装置、人工心肺装置や補助人工心臓など専門性の高いものまであり、多岐にわたっています。臨床工学部はそれらの医療機器を、いつでも安全に患者さんに使用できるように、日頃から保守点検を行うとともに医師、看護師らと連携してそれら进行操作する業務を担っています。現在、75名の臨床工学技士が在籍し、ME 機器管理、血液浄化、人工心肺、カテーテル、手術、集中治療などの領域で診療支援をしています。

輸血・細胞プロセッシング部 Department of Transfusion Medicine and Cell Processing

血液成分の不足があり、他に代替する治療法が無い場合に、足りなくなった血液成分を不足分だけ補うのが輸血療法です。当部では献血から製造される血液製剤を赤十字血液センターから取り寄せ、適切に管理すると共に、血液型・交差適合試験などの輸血検査を実施し、手術室・ICU・病棟に供給する部門です。他の医療機関では薬剤部が取り扱うことの多い、アルブミン・免疫グロブリンなど、血漿成分から製造されるすべての血漿分画製剤の管理供給も行ない、特定生物由来製剤全般について、適正使用や医療安全を推進しています。当部採血室では、当院で治療を受ける患者さんから手術に使用する自己血採血を行います。また、悪性腫瘍に対する造血細胞移植や免疫細胞療法を実施するための成分採血を行い、一部は細胞プロセッシングセンター（CPC）で細胞成分の調製や活性化培養などを行います。さらに術中出血量抑制目的にクリオ製剤調製、輸血関連免疫学的副作用予防のために洗浄血小板調製、また難治性腹水に対する腹水濾過濃縮処理などの業務で診療を支援しています。その他、全国の先天性溶血性貧血や赤芽球癆などの難治性稀少疾患診断のための特殊検査も受託しています。

総合感染症・感染制御部 Department of Infection Control

病院に来られる患者さんは、感染症であったり、病気や治療の影響で感染しやすくなったりしておられます。そのため、病院内では、微生物の検出状況を常に把握し、感染の発生や拡大を防止し、感染症患者さんの治療を適切に行うことが重要です。当院では、院内感染対策委員会を組織して感染対策を推進していますが、総合感染症・感染制御部はその中心であり、専門の医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師が活動に従事しています。感染症の検査と治療法に関する助言や、必要な感染対策への支援などを行って、患者さんが安心して診療を受けられる病院にしたいと努力しています。

薬剤部 Department of Pharmacy

薬は病気の治療にとっても大切ですが、必ずしも良いことばかりでは有りません。薬の良い面、悪い面、より効果的な使用法、気をつけなければならないことなど、薬に関するさまざまなことを患者さんに正しく知ってもらうことで、患者さんといっしょに安心・安全で質の高い薬物治療が行えます。薬剤部では患者さんの薬を調剤するばかりではなく、全ての患者さんに最適な薬物治療が提供できるように、さまざまな薬剤業務に取り組んでいます。市販されていない特別な薬の開発や調製を行う部門（製剤試験室）、抗がん剤など注射剤を無菌的に混合調製する部門（注射調整室）、入院の患者さんのベッドサイドで薬の説明や薬の適正使用を総合的に管理する部門（臨床薬剤管理室）、安全性情報や新たな使用法など様々な薬の情報を集めて病院内に情報を伝達する部門（医療品情報室）、調剤を行う部門などです。各部門が病院内の他の診療部門と連携を図ると共に、薬剤師が患者さんの身近な距離にいて、日々患者さんの薬物療法の安全確保と最適化に努めています。

栄養管理部 Nutrition Support Unit

栄養管理部では、口から食べることを大切に、医療スタッフの一員として次のような支援を行っています。入院中の食事の提供、さらに美味しく召し上がっていただくための検討を重ねています。またNST（栄養サポートチーム）活動を通して、疾患・症状に応じた栄養管理を実施しています。自宅においても食事療養が可能となるよう、入院はもとより外来患者さんへの具体的な食生活の相談・指導も行っています。患者さんの適切な栄養管理のために、部員総動員で日々研鑽に努めています。

看護部 Department of Nursing

看護部では、外来受診される患者さんおひとりお一人が受診の目的を達成され、疾病とともにその方にあった生活ができるような支援やケアを提供しています。入院病棟では昼夜を問わず24時間365日最も身近な存在として、安全で安心できるような看護体制で対応しています。看護師長を中心に、入院から退院まで担当看護師とチームメンバーが連携して看護ケアを行っています。また、エキスパートナースや看護の専門性を発揮できる専門看護師、認定看護師が医師や他職種医療チームと協力し、患者さんにとって最も良い医療、良質の看護が提供できるように活動しています。

臨床研究支援センター Intelligent Clinical Research and Innovation Center(iCLIC)

臨床研究支援センターは、治験（企業依頼・医師主導）のサポートのみならず、早期探索的研究も含めた臨床研究（多施設共同、自主研究など）を活性化させることを目的としています。当センターには臨床研究部門、研究資材管理部門、教育・研修部門があります。治験等の事務手続きや試験コーディネーターによるサポートを行っている臨床研究管理室、プロジェクトマネジメント室、生物・統計データ管理室による研究の立案から実施、データ解析等の支援を行い、試験薬管理室、試験医療機器管理室等、専門性をもった管理・運用、出口戦略までを見据えた臨床研究体制をとっております。今日の科学を明日の医療にするために国際水準で質の高い臨床研究への更なる貢献を目指しています。

医療安全対策室 Medical Safety Management Office

医療安全対策室では、本学創設の思想である「至誠の心」と「愛」を基本に、患者さんが安心して受診していただける、安全性が確保された質の高い、患者さん中心の医療を提供することを心がけています。日常の医療現場で発生したインシデント・アクシデントの情報を基にして、安全な医療組織を構築するために感染対策、医薬品安全管理、医療機器安全管理等の部署と連携し医療安全対策に取り組んでおります。また組織を横断した改善が行えるよう、各部門で選任された医療安全推進者であるリスクマネージャーと連携し、複数部門に渡るインシデント・アクシデント情報の共有と組織を横断した検討および改善策の立案・実行・評価活動を行っております。さらに医療に係る安全管理のための基本的な考え方および具体的方策等についての教育・研修なども企画し、医療安全についての意識、安全に業務を遂行するための技能の向上や、チームの一員としての意識の向上等を図っております。

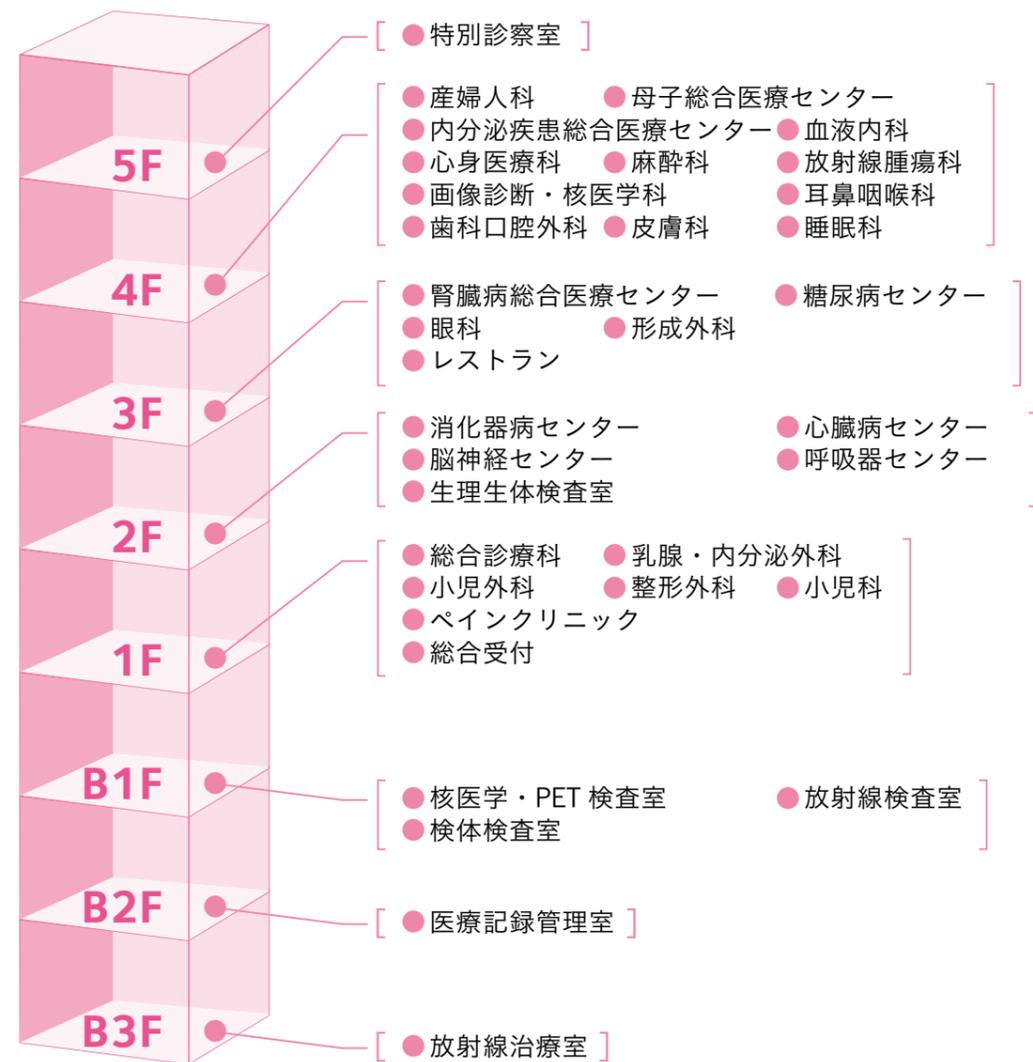
からだ情報館 Patient's Library

「からだ情報館」は、病気やからだについてのさまざまな情報を調べ、学んでいただくことを目的とした場所です。外来患者さんだけでなく、ご家族やご面会の方々、どなたでもご利用いただけます。館内では医学辞典やわかりやすい医学書、一般向けの医学雑誌を閲覧したり、医療関係のビデオやDVDを視聴することができます。インターネットを利用して、医療の最新情報を探すこともできます（※インターネットのご利用は医学情報の検索・収集のみに限定しています）。図書や雑誌などの資料の貸出は行っていませんが、ご自由にお持ち帰りいただける医療に関するパンフレットを種々ご用意しております。知りたい病気についての情報が、どんな医学書に載っているか、どのような資料があるか、ご相談いただければ、当館スタッフが一緒にお探しいたします。また、当館の一角にある「がん情報サロン」では、疾患別のがん情報や治療に伴う副作用への対処法、患者会の情報が閲覧できます。定期的に看護師や薬剤師によるミニレクチャーも開催しております。どうぞお気軽にお立ち寄りください。

外来案内

平成 28 年 4 月現在

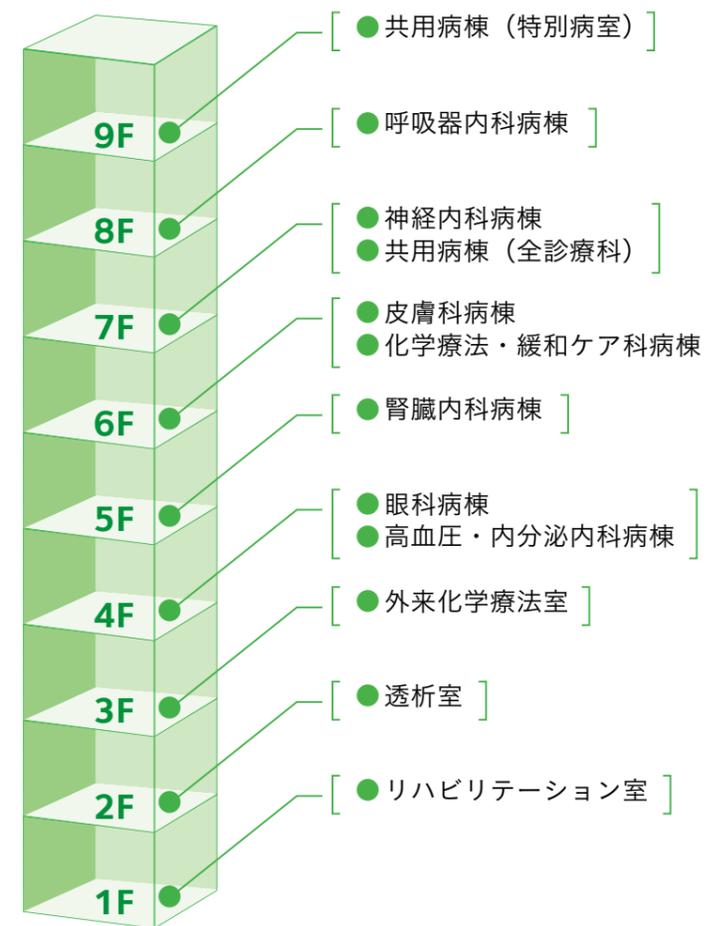
総合外来センター



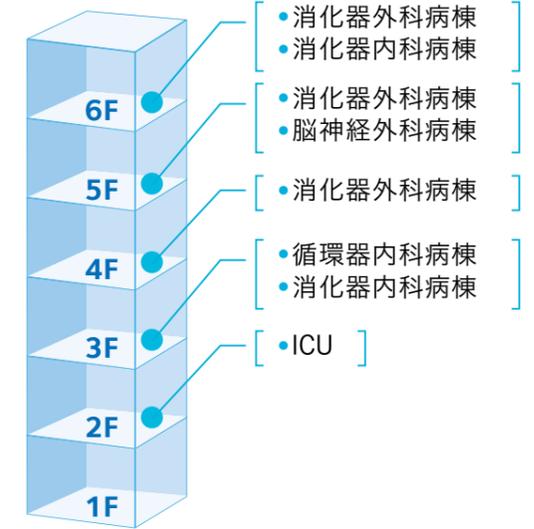
病棟案内

平成 28 年 4 月現在

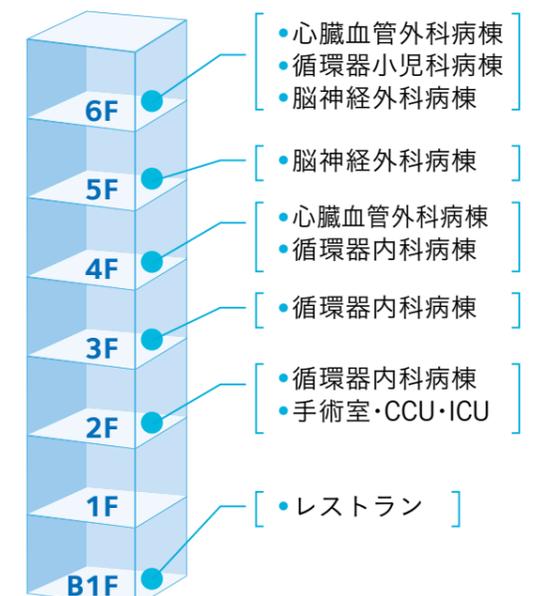
第 1 病棟



西病棟 A



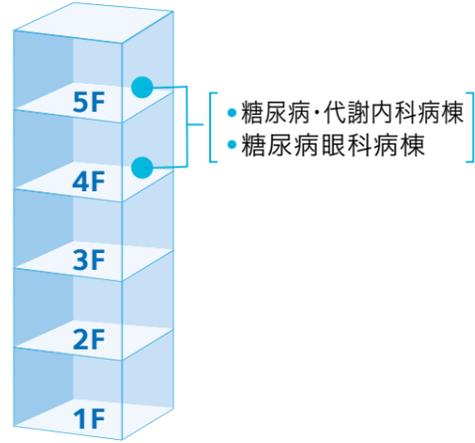
西病棟 B



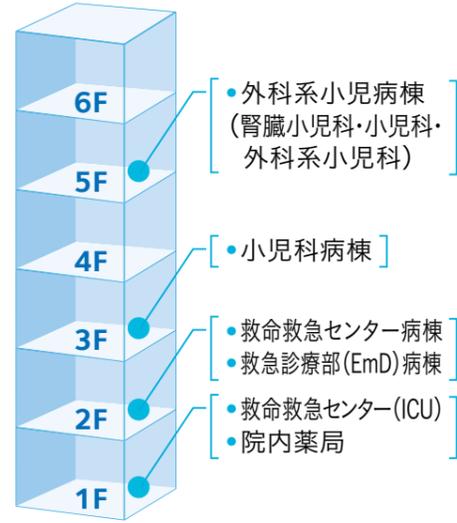
構内見取図

平成 28 年 4 月現在

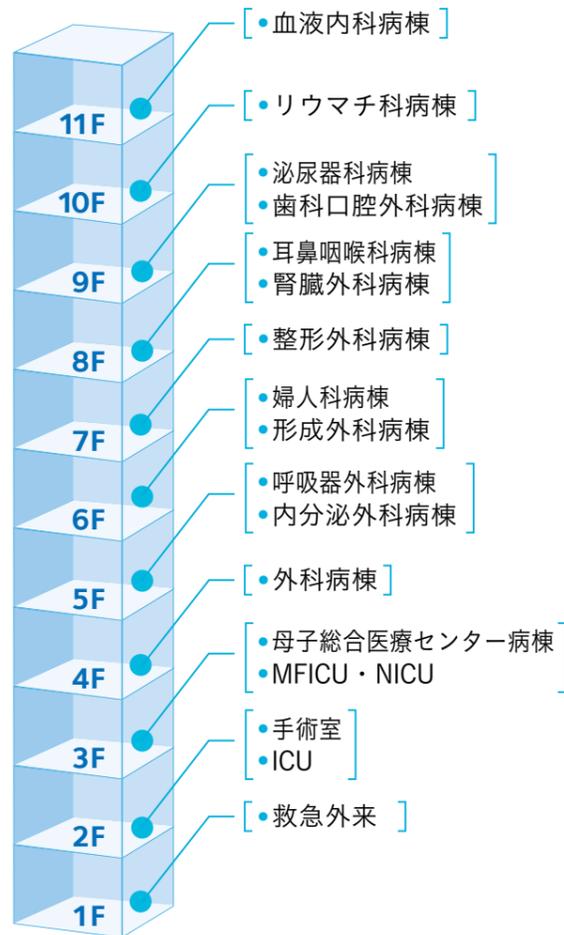
糖尿病センター



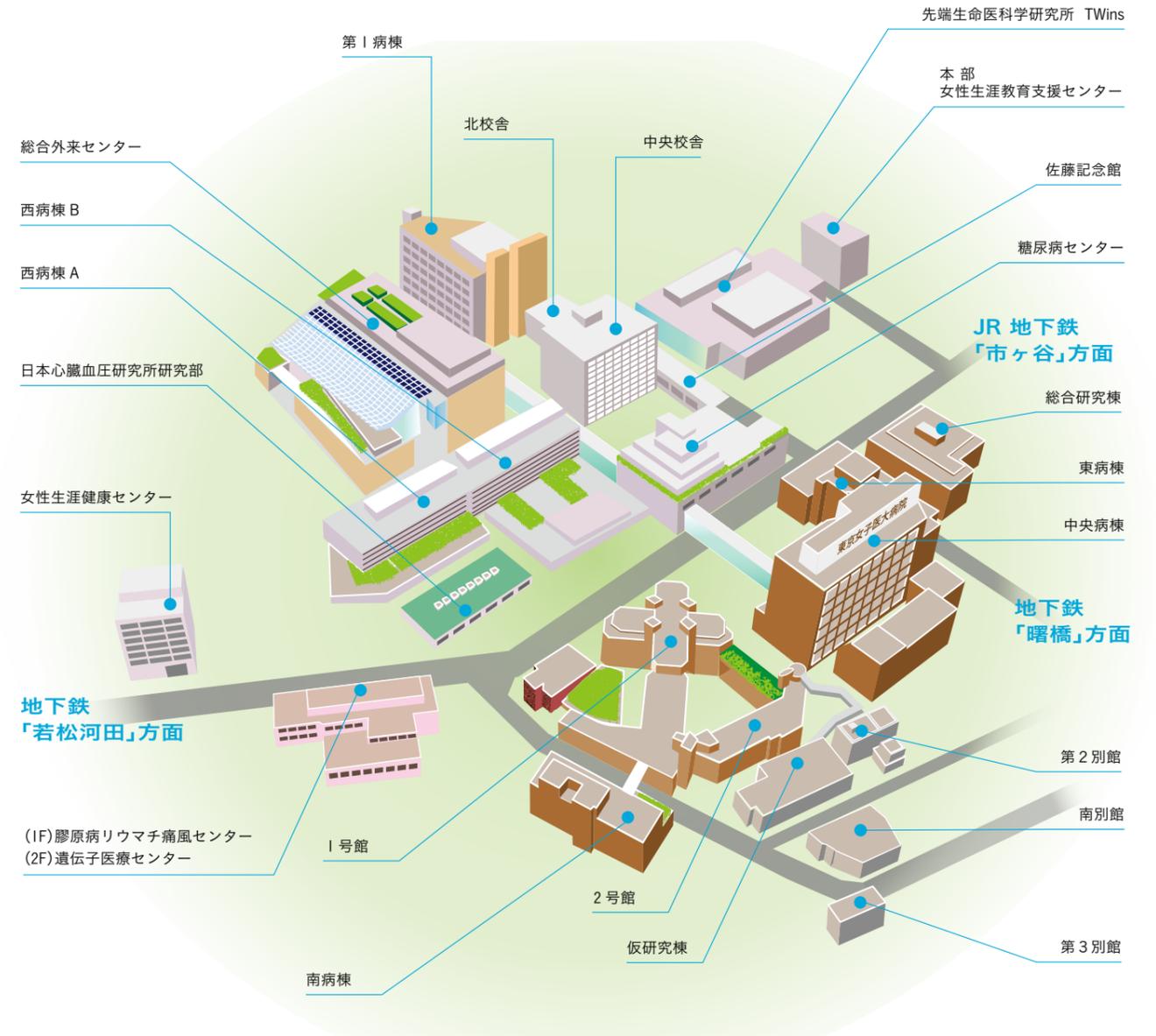
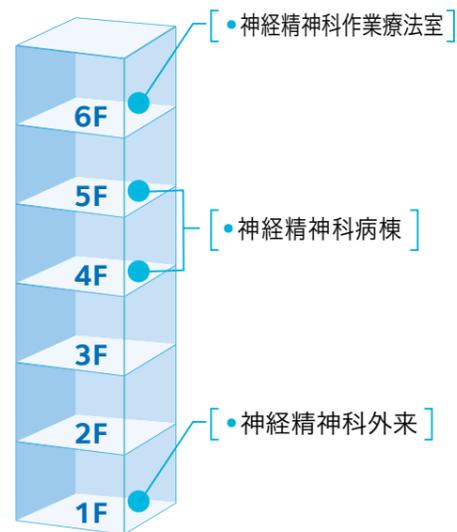
東病棟



中央病棟



南病棟



東京女子医科大学附属施設

- 東医療センター**
〒116-8567 荒川区西尾久 2-1-10
Tel:03-3810-1111
- 日暮里クリニック**
〒116-0013 荒川区西日暮里 2-20-1
サンマークシティ日暮里 ステーションポートタワー4・5階
Tel:03-3805-7771
- 附属成人医学センター**
〒150-0002 渋谷区渋谷 2-15-1
渋谷クロスタワー 20・21階
Tel:03-3499-1911
- 附属膠原病リウマチ痛風センター本部**
〒162-0054 新宿区河田町 10-22
Tel:03-5269-1711
- 附属膠原病リウマチ痛風センター分室**
〒163-0804 新宿区西新宿 2-4-1
新宿 NSビル 4階
Tel:03-3348-0988
- 附属東洋医学研究所**
〒114-0014 北区田端 1-21-8
NSKビル 3階
Tel:03-6864-0821
- 附属女性生涯健康センター**
〒162-0056 新宿区若松町 9-9
パークホームズ新宿若松町1階
Tel:03-5363-0723
- 附属遺伝子医療センター**
〒162-0054 新宿区河田町 10-22
Tel:03-3353-8111
- 附属八千代医療センター**
〒276-8524 千葉県八千代市
大和田新田 477-96
Tel:047-450-6000